「川の国埼玉」海はないけど日本一の川がある
～ Next 川の再生＆リバサポ～

埼玉県 県土整備部 河川環境課　主幹　石野（いしの）　剛史（たけし），技師　郡司（ぐんじ）　柚香（ゆか）

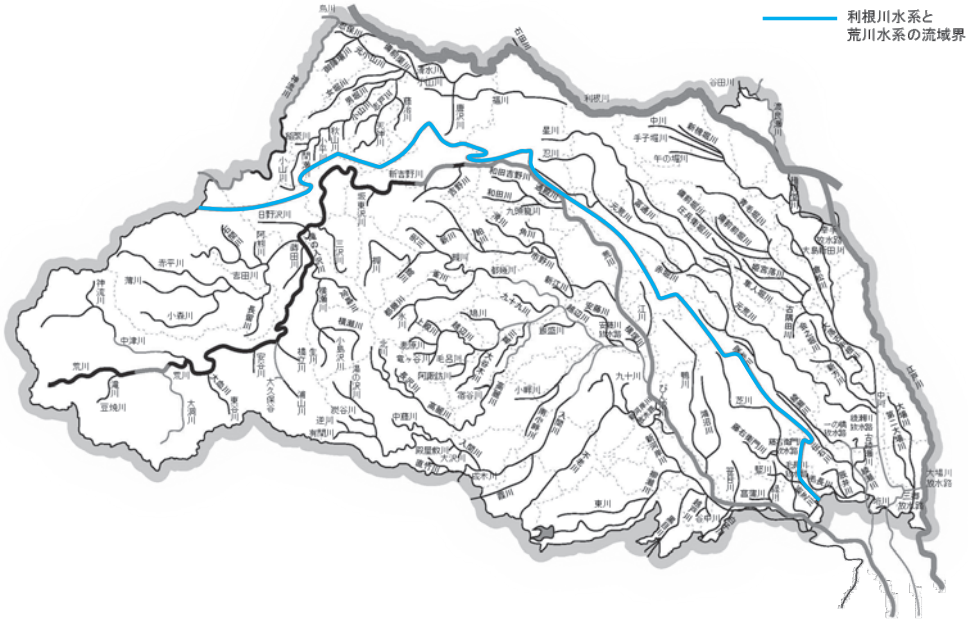
1.　はじめに（川の再生，きっかけは川幅日本一）

平成 20 年度から着手した埼玉県の「川の再生」プロジェクト。県民誰もが川に愛着を持ち，ふるさとを実感できる「川の国埼玉」を実現し，川が地域の共有資産として広く県民に認識され，地域による持続的・自立的な改善行動，維持管理が行われる姿を目標としている。

このプロジェクトは，荒川の川幅[1]が日本一であることをきっかけに，埼玉県の川のポテンシャルをいろいろと調べたことに始まる（写真－1）。また，平成 19 年の調べでは県土に占める河川の面積割合[2]が 3.9% で，これも日本一だった（図－1）。

写真－1　日本一の川幅（荒川 / 鴻巣市・吉見町）

海なし県の埼玉としては，この二つの川の日本



図－1　埼玉県の河川

一を生かさない手はないということで，上田清司知事（当時）2期目の3大プロジェクトの一つに「川の再生」が位置付けられた。戦略的なPRのために，日本一はとても重要である。餃子の日本一などが毎年議論されるのと同様に，日本一の称号を掲げてやる気を出すことは，土木行政の取組でも大切である。

まず旗印として，「川幅日本一の標（しるべ）」を直轄区間の荒川堤防に設置（占用）した（**写真－2**）。これがヒット商品だった。電柱のようなシンプルな見た目，「こんなのに税金使って何を考えているんだ」，「そもそも，川幅って水面がないだろ」，「何が川幅日本一だ，誰が決めた」など，電話でたくさんのご意見をいただき，新聞にもしっかりと取り上げられたことで，後のメディアへの露出につながっていった。

写真－2
川幅日本一の標

2. 埼玉県の特徴

そもそもこの二つの日本一，かつて県央の南部・東部が，利根川・荒川の氾濫源であったことを意味している。川幅が広いのは遊水機能を持たせるため，坂東太郎（利根川）に次ぐ関東の暴れ川 荒川を大きく囲むために整備した堤防と堤防の幅が広大だったということであり，河川の面積割合が大きいのも，湿地のような土地を干拓するため，網の目のように排水路を掘った証である。

まさに「翔んで○○」のように，「都民の生活を支えるため，埼玉県民が土地や穀物を提供し，耐え忍んできた」なんて暗い話題ではなく，それを逆手に「川だらけ」を楽しもうというのが本県のスタンスであり，県民性（私見）である。

この前向きでちょっとくだらないところが，日本テレビの「月曜から夜ふかし」や「秘密のケンミンSHOW」で，さらに最近では「しゃべくり007」などでも取り上げられるまでになったのである。

3. 新たな川の再生の取組

平成20年度以降の川の再生に関する取組については，当課のホームページ（右の二次元コード）を参照願いたい。

今回は，取組中の「水辺空間とことん活用プロジェクト」と「Next川の再生・水辺deベンチャーチャレンジ（以下，「Next川の再生」という）」，「SAITAMAリバーサポーターズプロジェクト」（環境部水環境課所管，以下，「リバサポ」という）の3事業を紹介させていただく。

特に，企業等のアイデア・ノウハウを活用しハード面の整備を行う「Next川の再生」と，ソフト面で企業や団体の取組を支援する「リバサポ」は，川に関心のある企業等が両事業に関わってもらえるよう，相互に連携を図っている。

「リバサポ」に関わる企業や川の国応援団（川で活動する住民団体）の「Next川の再生」への参画を促し，そのアイデアを活かし，魅力ある水辺空間の整備・創出を進めるとともに，その後の利活用にも参画してもらう。

また，「Next川の再生」で整備した水辺空間で行われるイベントや美化活動への参加を「リバサポ」に関わる個人に促すことで，企業，応援団，個人による川との共生・保全に向けた活動が活性化するなど，両事業の連携による相乗効果が見込まれる。

(1) 水辺空間とことん活用プロジェクト

国の規制緩和を活用し，河川敷地を商業利用することで地域活性化を図る「水辺空間とことん活用プロジェクト」（河川空間のオープン化）を，平成25年度から進めている。

この取組は，地域活性化を目指す地元市町村を中心に，企業，河川管理者（県），地域住民等をメンバーとする協議会形式により，関係者の合意形成を図っており，取組の主体性，事業の継続性を高める実施体制となっている。

また，企業等が商業利用を目的に河川を占用す

写真－3　河川内のアクティビティ（荒川／秩父市／ジオグラビティパーク）

る場合，建物を建てても県内一律年間 360 円 /m^2，土地を現状のまま利活用する場合は年間 15 円 /m^2 であり，この設定金額も企業等の進出意欲を後押ししている。

これにより企業等の持続的な河川利用が進み，良好な河川空間が保たれるスキームとなっている。本県においては 16 カ所で開業しており，その数は「日本一」となっている（**写真－3**）。

⑵　Next 川の再生

令和 3 年度からは「水辺空間とことん活用プロジェクト」を進化させ，企画段階から企業等が参画し，商業利用を前提としたオーダーメイドの水辺づくりを行う「Next 川の再生」を進めている。現在，年間 5 千万人が訪れる越谷レイクタウンや飯能河原（**写真－4**）など，県内 14 カ所で整備検討を進めている。今後，さらに水辺に多くの人を呼び込み，新たな産業や観光の拠点が誕生する見込みである。

写真－4　バーベキューや水遊びでにぎわう飯能河原（入間川／飯能市）

⑶　リバサポ

「Next 川の再生」と両輪で進める「リバサポ」は，新たな個人，企業の川の保全・共生活動参画を促進するため，活動する川とのマッチングや企業と個人，「川の国応援団」等との連携を支援する。団体に属さない個人に対する働きかけ（SNS による情報発信等）を行うことで，若い世代の参画を促進し，幅広い世代の個人サポーターへの登録を促す。令和 4 年度末時点で 1.3 万人の方が個人サポーターに登録している。

また，企業には企業サポーターとして参画を促し，企業同士や「川の国応援団」とのマッチングなどにより，川を活用した新規ビジネスの立ち上げ，社会貢献活動の支援を行い，川の保全活動や魅力創出活動などの活発化，活動内容の拡大を図っている。令和 4 年度末で 308 社が企業サポーターに登録している。

4.　取組の成果

これまでの「川の再生」の取組により，多くの県民が川に関心を持つことで水質が劇的に改善し，アユの棲める水質の目安（BOD（生物化学的酸素要求量）3 mg/ℓ 以下）が平成 19 年度の 59% から令和 3 年度には 89% になっている。また，地域による持続的・自立的な維持管理活動が拡大した（「川の国応援団」が管理する河川の延長は 580 km）。

さらに，これまでに施設整備や企業の商業利用が進んだことで，河川を利活用する県民が大幅に増加し（水辺空間とことん活用プロジェクトを行っている箇所では 30 万人の増加），新たな産業の場や観光地として雇用と収益の拡大が図られた。

例えば，令和 3 年度に河川敷地に全国で初めて開業した入間川（狭山市）のスターバックスコー

写真－5　河川敷地のオープンカフェ
（入間川／狭山市）

写真－7　荒川を 80 km 下る SUP レース
（荒川／長瀞町～戸田市）

写真－6　グランピング施設（都幾川／ときがわ町）

写真－8　リバークリーンの様子（荒川／戸田市）

ヒーのオープンカフェには，年間 24 万人が訪れ，ゴールデンウィークには関東で 5 番目の売上となった（写真－5）。

さらに，都幾川（ときがわ町）のグランピング施設は，プライベート河原のような特別な空間が人気のスポットとなっており，芸能人もお忍びで訪れるほどである（写真－6）。また，荒川（秩父市）の渓谷を生かした，吊り橋から飛ぶバンジージャンプは年間約 1 万人が訪れるなど，グランピング施設と合わせ，東京から手軽に行ける観光地として，しばしばメディアに取り上げられている。

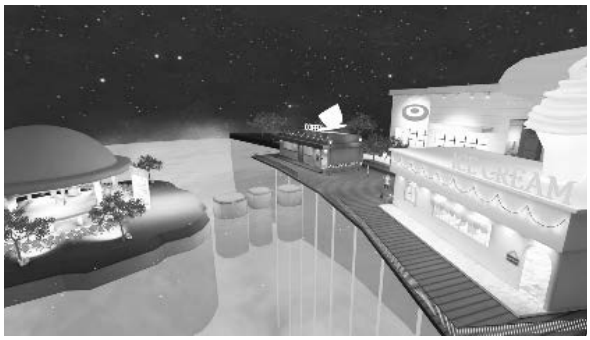
5.　展開の可能性（多様な主体と連携拡大）

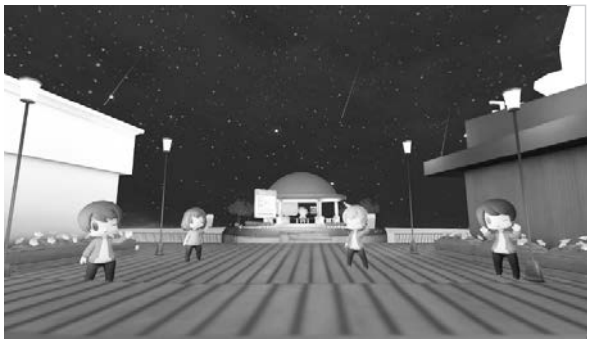
⑴　「リバサポ」による上下流交流促進

河川の上流部と下流部の連携に発展した事例として，荒川を上流から下流まで 80 km 下る SUP（スタンドアップパドルボード）レースや，レースと同時開催された各地域での「リバークリーン」の取組がある（写真－7，8）。上流で川のごみ問題解決に取り組む企業サポーターの想いに賛同した別の企業サポーターが，上流での取組と同時に下流でも清掃活動を行った。

さらに，もともと川を訪れる機会がある人を“川好き”にする取組として，河川敷に犬の散歩に来る人を対象とした「リバ犬（いぬ）」や，川沿いをサイクリングする人を対象とした「リバチャリ」を実施した。例えば「リバチャリ」では，県内の自転車メーカーと連携し，川沿いサイクリングの魅力発信と自転車で川沿いのゴミ拾いをする「清掃ライド」を組み合わせた。

今後は，荒川放水路 100 周年イベント（国土交通省 関東地方整備局 荒川下流河川事務所主催）との連携も進め，取組を拡大していきたい。





写真－9　バーチャルレイクタウン水辺 de ベンチャーチャレンジ Ver.
（元荒川・大相模調節池 / 越谷市）

⑵　**Mizbering（ミズベリング）※**
全国初の「バーチャルミズベリング」の開催

※新しい水辺活用の可能性を切り開くための官民一体の協業プロジェクト

本県では，ミズベリングが提唱した毎年 7 月 7 日に全国一斉で行われる「水辺で乾杯」イベントを令和 4 年度に進化させた。埼玉バーチャル観光大使である春日部つくしさん協力のもと，全国で初めてバーチャル空間にリアルな調節池を再現し，「水辺で乾杯」するライブイベントを開催，YouTube などを通じ約 5 千人が参加した。これまで川に興味を持っていなかっただろう方々をリアルご当地巡りとして現場の水辺に呼び込む，新たな企画が話題を呼んだ（バーチャリアル・ツーリズム）。

令和 5 年度は，7 月 22 日（土）に越谷レイクタウンで行われた水辺イベント「Lake and Beach 2023」とコラボした「リアル＆バーチャル水辺で乾杯！」を実施した（**写真－9**）。

スマートフォンから入ることができるメタバース空間上に，「Next 川の再生」によって整備される未来の大相模調節池（元荒川）を表現し，その世界観を春日部つくしさんに紹介してもらった。イベントには約 100 名（遠くは広島から）の方に参加いただき，この世界観を春日部つくしさんと一緒に体験してもらった。

6.　おわりに

河川空間のオープン化では，先行して事業を進めていた隅田川（東京都）のカフェを追い抜き，平成 25 年に関東初の取組としてテレビ東京の「ワールドビジネスサテライト」に取り上げていただいた。また「Next 川の再生」では，コロナ禍のアウトドア志向でオーバーツーリズムとなった飯能河原（入間川 / 飯能市）のバーベキュー問題を解決するため，有料化の社会実験にタイムリーに取り組み，NHK や日本テレビなどの他，Yahoo! ニュースでも取り上げられ，多くの方から高い評価をいただいた。このように民間や多様な主体と連携することで，情報が加速度的に発信されていく。

今後も，日本一や全国初，スピード感，タイムリーなどを意識して尖った取組を進め，いつの日か「埼玉は川の国だ」と全国から認知していただけるよう，これからも頑張る所存である。

【用語解説】

1）　川幅の定義：堤防から堤防の距離。

2）　河川の面積割合：県の面積に対する河川の面積割合。平成 19 年当時の調べでは 3.9% で埼玉県が日本一。大阪府が 3.8% で 2 位（現在は徳島県が 1 位，埼玉県が 2 位）。